

分類学者の減少について—新種記載の観点からの考察

〈当該研究の状況〉

▼先行研究の名前

松浦啓一「分類学者が絶滅を逃れる道：生物多様性研究における分類学の役割」

▼先行研究の要約

動物分類学者は少なくなっており、このままだと生物多様性研究に支障をきたしてしまう。しかし、分類学者はこれに対して努力している人が少ない。なのでこの論文では、動物分類学者が努力すれば可能な具体的な考えを3つ（「新種記載を急げ」、「個別研究からグループ研究へ」、「生物多様性情報データベースの活用」）示した。特に「新種記載を急げ」の章では、2001年頃、新種記載のみの論文を受け付けられないようになり、代わりにZootaxaというオンライン出版誌が対応するようになったと述べられた。しかしこれだけではなく、動物分類学を繁栄させるには跡を継ぐ人を育てる必要がある。

〈先行研究の課題〉

▼結論

先行研究のまとめには動物分類学者が努力すればできることを3つ示しているがこれで十分なのか。

▼背景

3つ示しただけでは十分でないと感じたから。

〈RQ:リサーチクエスション〉

先行研究で書かれている「新種記載を急げ」の章の「新種記載のみの論文を受け付けられない」という方針は本当にふさわしいのか。

〈RQに対する仮説〉

▼結論

先行研究の「新種記載を急げ」の章の「新種記載のみの論文を受け付けられない」という方針はふさわしくない。

▼背景

この方針をおこなっても新種の数が増えないと思ったから。なぜなら、分類学者が減ってきているし、それに加えて新種記載のみの論文を受け付けるネットのみに頼っていたらデータの管理が大変そうだから。

〈研究目的〉

本研究は、「新種記載のみの論文は受け付けられない」という方針はふさわしくない事を明らかにすることが目的である。方法として、新種の数グラフを見て新種記載のみの論文を受け付ける時と受け付けられない時を比べる。

〈研究内容／研究方法〉

【第1章:データの比較①】

動物(昆虫)の新種の数データを見て新種記載のみの論文を受け付ける時と受け付けられない時を比べる。

具体的には、2001年に「新種記載のみの論文を受け付けられない」方針を示して、代わりにネットで新種記載のみの論文を受け付けるようになったので、1991年から2001年の昆虫の新種の増加数と2001年から2011年の昆虫の新種の増加数を調べて比べる。

【第2章:データの比較②】

カブトムシ、バッタの新種の数データを見て新種記載のみの論文を受け付ける時と受け付けられない時を比べる。

具体的には、2001年に「新種記載のみの論文を受け付けられない」方針を示して、代わりにネットで新種記載のみの論文を受け付けるようになったので、1991年から2001年の昆虫の新種の増加数と2001年から2011年の昆虫の新種の増加数を調べて比べる。

〈研究結果〉

【第1章:データの比較①】

自分で調べた結果、昆虫の新種の数にデータがなくて検証ができなかった。

【第2章:データの比較②】

自分で調べた結果、カブトムシ、バッタの新種の数にデータがなくて検証できなかった。

〈結論〉

先行研究の「新種記載を急げ」の章の「新種記載のみの論文を受け付けない」という方針はふさはしいかわからなかった。

〈結論の考察〉

- ・日本昆虫学会の記事がお金がかかって見れないことに疑問を持った。
- ・カブトムシの数がはっきり分からないのはおかしいと思った。
- ・分類学者の数が減ると思う。先行研究の著者が言っているように、分類学者は状況を改善するには努力していないと思う。

これらをふまえて、私は、日本にいるカブトムシなどの昆虫の種類の数を知ることができないのは、日本昆虫学会が昆虫の種類数を公開しなくて曖昧なままにしているからだと思った。(公開しても見つけられないような掲載の仕方はよくないのではないかと思った。)

〈参考文献〉

松浦啓一「分類学者が絶滅を逃れる道:生物多様性研究における分類学の役割」[閲覧日:2023年8月18日]

本川雅治「東アジア産小型哺乳類の分類学」[閲覧日:2023年8月18日]